

# アジアモンスーン地帯のため池文化

小山田宏一(奈良大学)

## 1 アジアモンスーン地帯のため池

アジアモンスーン地帯の東アジア、中国南部、東南アジア、南アジアは湿潤な気候で、水田稲作農業が栄えた。気候は雨季と乾季にわかれ、雨季の降雨を効率的に利用するため池灌漑が発達し、その水利慣行は、地域社会を維持するルールをつくった。講座では、スリランカ・デカン高原、中国、韓国、日本などのため池を俯瞰してみよう。

## 2 スリランカ

光り輝く島と呼ばれるスリランカは、南インドからアリア人が移住した紀元前 5 世紀頃に、ため池が出現したという。史料によると、紀元前 4・3 世紀は地形を利用した程度であったが、紀元後 1～3 世紀になると、取水施設であるピゾー・コウワと呼ばれる暗渠取水工が出現して規模が拡大し、5 世紀後半には巨大貯水池の時代を迎えたという。小規模ため池は、水路でつながる連珠式である。上流の余水・排水を下流の池に送り、用水を反復利用する。南インドのデカン高原は、スリランカのため池の故地と目される地域である。デカン高原の稲作は、乾燥農業体系下に雑穀として栽培された。ため池は水路でつながる連珠式だが、スリランカとは異なり、ため池の溜まりを均一にする工夫である。

## 3 中国

中国のため池は、池の字ではなく、「陂」「塘」を用いる。その歴史は古く、春秋戦国時代には出現したという。どのような方法でため池が造られたのかははっきりしないが、史料によると、谷出口をせき止め貯めるタイプ、窪地に堤を築き貯めるタイプ、河をせき止めて貯めるタイプ、湧水をせき止めて貯めるタイプなどがあり、漢代には、取水水量を調節する水門、非常時の余水を放流する洪水吐などの施設が整備された。とくに、ため池発達史からみて、洪水水量を調節する遊水池(浙江省南湖)、沿海部の開発に際し灌漑のほか除塩用の水を確保する大型ため池(浙江省鑑湖)の存在は注目される。最近の調査によると、浙江省の良渚遺跡群で、紀元前 3100 から紀元前 2600 年頃の堤が確認されている。洪水を防ぐ治水の堤なのか、水を貯めるため池の堤なのか、結論は出ていないようだが、とても気になる存在である。

## 4 韓国

最古の事例は忠清北道の義林池である。5世紀頃と考えている。義林池は、山間部の河谷を塞ぎ止めたダム式ため池で、粗朶を敷設する地盤補強工法で堤の基礎部を固める。このようなダム式ため池の系譜は半島内でたどれない。ダム式ため池の設計・施工・運営には、高度な専門知識と技術が不可欠である。当時の外交関係からみて、百済が中国の東晋・南朝から技術供与を受けたのだろう。韓国のため池史では、高麗時代に沿海部の開発が本格化し、中国の鑑湖でみたような灌漑と除塩の用水を貯める大型ため池が出現することに注目したい。中国系の農学情報が史料に見られることから、中国江南で発達した水利技術の影響を深く受けていると考えられる。

## 5 日本

古代日韓のため池は、池の形式、築堤技術などに共通点が多く、いわば兄弟の関係にある。最古のため池は築造当初の樋管の年輪年代から 616 年に築造されたことが明らかになった大阪府狭山池である。築堤工法は粗朶を敷設する地盤補強工法と補強盛土工である。取水装置の樋は北堤東端の地山に、

洪水吐は西端に設置する。狭山池が出現した背景には、治水灌漑施設を整備して、耕地の拡大と再生産を保障する一方、国家的土地所有を目指す国家的勸農政策がある。推古 10 年(602)年、百濟僧觀勒が日本に土木技術情報をふくむ天文地理書を伝えるなどした当時の外交関係からみて、狭山池の土木技術や運営方式は百濟に要請し提供を受けたのだろう。

#### **6 日本のため池灌漑の発展**

17 世紀初頭の狭山池下流域では、狭山池を起点にする幹線水路から狭山池の水を受けとる広域ため池群が整備された。狭山池が親池で、各村の池は子池にあたる。このようなシステムは番水と呼ばれ、狭山池の水は各村の生産高(石高)を基準に公平に分配された。尺八樋は番水を支える水利施設である。尺八樋の取水口は戸板(ゲート)式であり、放出水量は戸板の開閉度を調節して決定された。これにより貯水量の多少にかかわらず、池水の公平な分配が実現された。